

# 伸び支度

島崎藤村

青空文庫



十四、五になる大概の家の娘がそうであるように、袖子もその年頃になつてみたら、人形のことは次第に忘れたようになつた。

人形にさせる着物だ襦袢だと言つて大騒ぎした頃の袖子は、いくつそのために小さな着物を造り、いくつ小さな頭巾などを造つて、それを幼い日の楽しみとしてきたか知れない。町の玩具屋から安物を買つて来てすぐに首のとれたもの、顔が汚れ鼻が欠けるうちにオバケのように気味悪くなつて捨ててしまつたもの——袖子の古い人形にもいろいろあつた。その中でも、父さんに連れられて震災前の丸善へ行つた時に買つて貰つて来た人形は、一番長くあつた。あれは独逸の方から新荷が着いたばかりだという種々な玩具と一緒に、あの丸善の二階に並べてあつたもので、異国の子どもなりながらに愛らしく、格安で、しかも丈夫に出来ていた。茶色な髪をかぶつたような男の児の人形で、それを寝かせば眼をつぶり、起こせばぱちりと可愛い眼を見開いた。袖子があの人形に話しかけるのは、生きている子供に話しかけるとほとんど変わりがなくらいであつた。それほど好きで、抱き、擁え、撫で、持ち歩き、毎日のように着物を着せ直しなどして、あの人形のためには小さな蒲団や小さな枕

までも造つた。袖子が風邪でも引いて学校を休むような日には、彼女の枕もとに足を投げ出し、いつでも笑つたような顔をしながらお伽話の相手になつていたのも、あの人形だつた。

「袖子さん、お遊びなさいな。」

と言つて、一頃はよく彼女のところへ遊びに通つて来た近所の小娘もある。光子さんといつて、幼稚園へでもあがろうという年頃の小娘のように、額のところへ髪を切りさげている児だ。袖子の方でもよくその光子さんを見に行つて、暇さえあれば一緒に折り紙を畳んだり、お手玉をついたりして遊んだものだ。そういう時の二人の相手は、いつでもあの人形だつた。そんなに抱愛の的であつたものが、次第に袖子から忘れられたようになっていった。そればかりでなく、袖子が人形のことなどを以前のよう大騒ぎしなくなつた頃には、光子さんともそう遊ばなくなつた。

しかし、袖子はまだ漸く高等小学の一年を終るか終わらないぐらいの年頃であつた。彼女とても何かなしにはいられなかつた。子供の好きな袖子は、いつの間にか近所の家から別の子供を抱いて来て、自分の部屋で遊ばせるようになった。数え歳の二つにしかならない男の児であるが、あのきかない氣の光子さんに比べたら、これはまた

何なんというおとなしいものだろう。金きんのすけ之助さんという名前なまえからして男おとこの子こらしく、下しもぶく  
 れのしたその顔かおに笑えみの浮うかぶ時は、小ちいさな鬢えくぼがあらわれて、愛あいらしかった。それに、こ  
 の子この好よいことには、袖そで子の言いうなりになった。どうしてあの少すこしもじつとしていないで、  
 どうかすると袖そで子この手てにおえないことが多おほかった光みつ子こさんを遊あそばせるとは大おほちが  
 子こは人でこ形にんぎようを抱だくように金きんのすけ之助すけさんを抱だいて、どこへでも好すきなところへ連つれて行ゆく  
 ことが出来できた。自じ分ぶんの側そばに置おいて遊あそばせなければ、それも出来できた。

この金きんのすけ之助すけさんは正月しょうがつ生まれの二つでも、まだいくらも人ひとの言こと葉はを知しらない。蕾つぼみの  
 ようなその脣くちびるからは「うまうま」ぐらいしか泄もれて来こない。母ははおや親い以外がの親したしいものを呼よ  
 ぶにも、「ちやあちやん」としかまだ言いい得えなかつた。こんな幼おきない子こ供どもが袖そで子この家いえへ連つ  
 られて来きてみると、袖そで子この父とうさんがいる、二人ふたりある兄にいさん達たちもいる、しかし金きんのすけ之助すけ  
 はそういう人ひと達たちまでも「ちやあちやん」と言いって呼よぶわけではなかつた。やはりこの幼おきな  
 い子こ供どもの呼よびかける言こと葉はは親したしいものに限かぎられていた。もともと金きんのすけ之助すけさんを袖そで子この家いえ  
 へ、初はじめて抱だいて来きて見みせたのは下げ女じよのお初はつで、お初はつの子こ煩ほん悩のうときたら、袖そで子こに劣おとらな  
 かつた。

「ちやあちやん。」

それが茶の間へ袖子を探しに行く時の子供の声だ。

「ちやあちやん。」

それがまた台所で働いているお初を探す時の子供の声でもあるのだ。金之助さんは、まだよちよちしたおぼつかない足許で、茶の間と台所の間を往ったり来たりして、袖子やお初の肩につかまったり、二人の裾にまといついたりして戯れた。

三月の雪が綿のように町へ来て、一晩のうちに見事に溶けてゆく頃には、袖子の家ではもう光子さんと呼ぶ声が起こらなかつた。それが「金之助さん、金之助さん」に変わった。

「袖子さん、どうしてお遊びにならないんですか。わたしをお忘れになつたんですか。」  
近所の家の二階の窓から、光子さんの声が聞こえていた。そのませた、小娘らしい声は、春先の町の空気に高く響けて聞こえていた。ちやうど袖子はある高等女学校への受験の準備にいそがしい頃で、遅くなつて今までの学校から帰つて来た時に、その光子さんの声を聞いた。彼女は別に悪い顔もせず、ただそれを聞き流したままで家へ戻つてみると、茶の間の障子のわきにはお初が針仕事しながら金之助さんを遊ばせていた。

どうしたはずみからか、その日、袖子は金之助さんを怒らしてしまった。子供は袖子の方へ来ないで、お初の方へばかり行つた。

「ちやあちゃん。」

「はあい——金之助さん。」

お初と子供は、袖子の前で、こんな言葉をかわしていた。子供から呼びかけられるたびに、お初は「まあ、可愛い」という様子をして、同じことを何度も何度も繰り返した。

「ちやあちゃん。」

「はあい——金之助さん。」

「ちやあちゃん。」

「はあい——金之助さん。」

あまりお初の声が高かつたので、そこへ袖子の父さんが笑顔を見せた。

「えらい騒ぎだなあ。俺は自分の部屋で聞いていたが、まるで、お前達のは掛け合いじやないか。」

「旦那さん。」とお初は自分でもおかしいように笑つて、やがて袖子と金之助さんの顔を見くらべながら、「こんなに金之助さんは私にばかりついてしまつて……袖子さんと

金之助さんとは、今日は喧嘩です。」

この「喧嘩」が父さんを笑わせた。

袖子は手持ち無沙汰で、お初の側を離れないでいる子供の顔を見まもった。女にもしてみたいほどの色の白い児で、優しい眉、すこし開いた唇、短いうぶ毛のままの髪、子供らしいおでこ——すべて愛らしかった。何となく袖子にむかつてすねているような無邪気さは、一層その子供らしい様子を愛らしく見せた。こんないじらしさは、あの生命のな  
い人形にはなかつたものだ。

「何と言つても、金之助さんは袖ちゃんのお人形さんだね。」  
と言つて父さんは笑つた。

そういう袖子の父さんは繻で、中年で連れ合いに死に別れた人にあるように、男の手一つでどうにかこうにか袖子たちを大きくしてきた。この父さんは、金之助さんを入形扱いにする袖子のことを笑えなかつた。なぜかなら、そういう袖子が、実は父さんの人形娘であつたからで。父さんは、袖子のために人形までも自分で見立て、同じ丸善の二階にあつた独逸出来の人形の中でも自分の気に入つたようなものを求めて、それを袖子にあてがつた。ちやうど袖子があの人形のためにいくつかの小さな



着物の造つて着せたように、父さんはまた袖子のために自分の好みによつたものを選んで着せていた。

「袖子さんは可哀そうです。今のうちに紅い派手なものでも着せなかつたら、いつ着せる時があるんです。」

こんなことを言つて袖子を庇護うようにする婦人の客なぞがないでもなかつたが、しかし父さんは聞き入れなかつた。娘の風俗はなるべく清楚に。その自分の好みから父さんは割り出して、袖子の着る物でも、持ち物でも、すべて自分で見立ててやつた。そして、いつまでも自分の人形娘にしておきたかつた。いつまでも子供で、自分の言うなりに、自由になるもののように……

ある朝、お初は台所の流しもとに働いていた。そこへ袖子が来て立つた。袖子は敷布をかかえたまま物も言わないで、蒼ざめた顔をしていた。

「袖子さん、どうしたの。」

最初のうちこそお初も不思議そうにしていたが、袖子から敷布を受け取つてみて、すぐにその意味を読んだ。お初は体格も大きく、力もある女であつたから、袖子の震えるからだへうしろから手をかけて、半分抱きかかえるように茶の間の方へ連れて行つた。

その部屋へやの片隅かたすみに袖子そでこを寝ねかした。

「そんなに心配しんぱいしないでいいんですよ。私が好よいようにしてあげるから——誰だれでもあ  
ることなんだから——今日きょうは学校がっこうをお休やすみなさいね。」

とお初はつは袖子そでこの枕まくらもとで言いった。

祖母おばあさんもなく、母かあさんもなく、誰だれも言いつて聞きかせるものもないような家庭かていで、生うまれ  
て初はじめて袖子そでこの経けい験けんするようなことが、思おもいがけない時ときにやつて来きた。めつたに学が校っこう  
を休やすんだことのない娘むすめが、しかも受じゆけん験まえ前でいそががっている時ときであつた。三月がつらしい  
春はるの朝あさ日ひが茶ちやの間まの障しょうじ子しに射さしてくる頃ころには、父とうさんは袖子そでこを見みに來きた。その様ようす子しをお  
初はつと問といたずねた。

「ええ、すこし……」

とお初はつは曖あいまい昧まいな返へんじ事じばかりした。

袖子そでこは物ものも言いわずに寝ね苦くるしがつていた。そこへ父とうさんが心しんぱい配はいして覗のぞきに來くる度たびに、し  
まいにはお初はつの方ほうでも隠かくしきれなかつた。

「旦那だんなさん、袖子そでこさんのは病びようき氣きではありません。」

それを聞きくと、父とうさんは半はん信しん半はん疑ぎのまま、娘むすめの側そばを離はなれた。日ひ頃ころ母かあさんの役やくまで兼か

ねて着物の世話から何から一切を引き受けている父さんでも、その日ばかりは全く父さんの畠にないことであつた。男親の悲しさには、父さんはそれ以上のことをお初に尋ねることも出来なかつた。

「もう何時だろう。」

と言つて父さんが茶の間に掛かっている柱時計を見に来た頃は、その時計の針が十時を指していた。

「お昼には兄さん達も歸つて来るな。」と父さんは茶の間のなかを見して言つた。「お初、お前に頼んでおくがね、みんな学校から歸つて来て聞いたら、そう言つておくれ——きようは父さんが袖ちやんを休ませたからツて——もしかしたら、すこし頭が痛いからツて。」

父さんは袖子の兄さん達が学校から歸つて来る場合を予想して、娘のためにいろいろ口実を考ええた。

「昼すこし前にはもう二人の兄さんが前後して威勢よく歸つて来た。一人の兄さんの方は袖子の寝ているのを見ると黙つていなかつた。」

「オイ、どうしたんだい。」

その権幕に恐れて、袖子は泣き出したばかりになった。そこへお初が飛んで来て、いろいろ言い訳をしたが、何も知らない兄さんは訳の分からないという顔付きで、しきりに袖子を責めた。

「頭が痛いぐらいで学校を休むなんて、そんな奴があるかい。弱虫め。」

「まあ、そんなひどいことを言つて、」とお初は兄さんをなだめるようにした。「袖子さんは私が休ませたんですよ——きようは私が休ませたんですよ。」

不思議な沈黙が続いた。父さんでさえそれを説き明かすことが出来なかつた。ただだ父さんは黙つて、袖子の寝ている部屋の外の廊下を往つたり来たりした。あだかも袖子の子供の日は最早終わりを告げたかのように——いつまでもそう父さんの人形娘ではいないような、ある待ち受けた日が、とうとう父さんの眼の前へやつて来たかのように。

「お初、袖ちゃんのことはお前によく頼んだぜ。」

父さんはそれだけのことをいいにくそうに言つて、また自分の部屋の方へ戻つて行った。こんな悩ましい、言うに言われぬ一日を袖子は床の上を送つた。夕方には多勢のちいさな子供の声にまじつて例の光子さんの甲高い声も家の外に響いたが、袖子はそれを寝ながら聞いていた。庭の若草の芽も一晩のうちに伸びるような暖かい春の宵ながらに

悲しい思いは、ちやうどそのままのように袖子の小さな胸をなやましくした。

翌日から袖子はお初に教えられたとおりにして、例のように学校へ出掛けようとした。その年の三月に受け損なつたらまた一年待たねばならないような、大事な受験の準備が彼女を待つていた。その時、お初は自分が女になつた時のことを言い出して、「わたしは十七の時でしたよ。そんなに自分が遅かつたものですからね。もつと早くあなたに話してあげると好かつた。そのくせ私は話そう話そうと思ひながら、まだ袖子さんには早かろうと思つて、今まで言わずにあつたんですよ……つい、自分が遅かつたものですからね……学校の体操やなんかは、その間、休んだ方がいいんですよ。」

こんな話を袖子にして聞かせた。

不安やら、心配やら、思い出したばかりでもきまりのわるく、顔の紅くなるような思いで、袖子は学校への道を辿つた。この急激な変化——それを知つてしまえば、心配もなにもなく、ありふれたことだというこの変化を、何の故であるのか、何の爲であるのか、それを袖子は知りたかつた。事実上の細かい注意を残りなくお初から教えられたにしても、こんな時に母さんでも生きていて、その膝に抱かれたら、としきりに恋しく思つた。いつものように学校へ行つてみると、袖子はもう以前の自分ではなかつた。

ことごと自由を失つたようで、あたりが狭かつた。昨日までの遊びの友達からは遽かに遠のいて、多勢の友達が先生達と縄飛びに鞠投げに嬉戯するさまを運動場の隅にさびしく眺めつくした。

それから一週間ばかり後になつて、漸く袖子はあたりまえのからだに帰ることが出来た。溢れて来るものは、すべて清い。あだかも春の雪に濡れて反つて伸びる力を増す若草のように、生長ざかりの袖子は一層いきいきとした健康を恢復した。

「まあ、よかつた。」

と言つて、あたりを見した時の袖子は何がなしに悲しい思いに打たれた。その悲しみは幼い日に別れを告げて行く悲しみであつた。彼女は最早今までのような眼でもつて、近所の子供達を見ることも出来なかつた。あの光子さんなぞが黒いふさふさした髪の毛を振つて、さも無邪気に、家のまわりを駆けつてゐるのを見ると、袖子は自分でも、もう一度何も知らずに眠つてみたいと思つた。

男と女の相違が、今は明らかに袖子に見えてきた。さものんきそうな兄さん達とちがつて、彼女は自分を護らねばならなかつた。大人の世界のことはずつかり分かつてしまつたとはいえないまでも、すくなくもそれを覗いて見た。その心から、袖子は言いあらわし

がたい驚きをも誘われた。

袖子の母さんは、彼女が生まれると間もなく激しい産後の出血で亡くなった人だ。その母さんが亡くなる時には、人のからだに差したり引いたりする潮が三枚も四枚もの母さんの単衣を雫のようにした。それほど恐ろしい勢いで母さんから引いて行った潮が——十五年の後になって——あの母さんと生命の取りかえっこをしたような人形娘に差して来た。空にある月が満ちたり欠けたりする度に、それと呼吸を合わせるような、奇蹟でない奇蹟は、まだ袖子にはよく呑みこめなかつた。それが人の言うように規則的に溢れて来ようとは、信じられもしなかつた。故もない不安はまだ続いていて、絶えず彼女を脅かした。袖子は、その心配から、子供と大人の二つの世界の途中の道端に息づき震えていた。

子供の好きなお初は相変わらず近所の家から金之助さんを抱いて来た。頑是ない子供は、以前にもまさる可愛げな表情を見せて、袖子の肩にすがったり、その後を追つたりした。

「ちやあちやん。」

親しげに呼ぶ金之助さんの声に変わりはなかつた。しかし袖子はもう以前と同じよう

にはこの男おとこの児こを抱だけなかつた。



# 青空文庫情報

底本：「少年少女日本文学館 第三卷 ふるさと・野菊の墓」講談社

1987（昭和62）年1月14日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第10刷発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：柳沢成雄

1999年12月22日公開

2005年12月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 伸び支度

島崎藤村

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>